

## 無理解が背景、実情知って 菓子博の電動車いす入場制限

2014年2月16日11時56分

印刷 メール スクラップ



シンポジウムで議論する川本さん（右端）ら＝広島市中区大手町4丁目

昨春に広島市で開かれた「ひろしま菓子博2013」で持ち上がった電動車いす入場制限問題は、障害を持つ人たちにとってショックなできごとだった。抗議を受けて主催者は入場を認めたが、障害者や支援者には、その後の対応にも不満が残った。「障害者への無理解が背景にある」「実情が社会に伝わっていない」。広島市で今月あったシンポジウムで課題が話し合われた。

シンポジウムは「ひろしま菓子博2013から学んだこと」と題し、障害のある地方議員らでつくる「障害者の自立と政治参加をすすめるネットワーク」（事務局・名古屋市）が主催した。

広島県・市・業界団体などでつくる菓子博実行委員会は昨年4月19日に開幕した当初は、「安全確保のため」として電動車いすの入場を禁じ、手動車いすへの乗り換えを求めた。障害者団体などから「電動車いすは体の一部」と抗議され、同22日から原則、全日程で入場を認めた。緊急時の避難や事故防止のため、スタッフが付き添うことにした。

シンポの冒頭、電動車いすを使うNPO法人「障害者生活支援センター・てごーす」の川本澄枝事務局長（50）が昨年4月下旬、菓子博会場を訪れた際のビデオ映像が紹介された。てごーすの企画運営主任、松尾晴彦さん（54）が付き添い、撮影した。

川本さんは入場すると、「安全を確保したうえでご案内させていただきます」と伝えられ、車いすでパビリオン内を回る川本さんにスタッフ2人が付き添う。屋外に出ると、「車いすのお客様が通ります。ご注意ください」と、関係者がメガホン型の拡声機の声で呼びかけた。

別のパビリオンにも同行するスタッフに、川本さんは「すみません。もう大丈夫です。お願いする時はお願いしますので」と断った。「障害者に何かをしてあげようという善意でしょうが、監視されているようで、ゆっくり見学できなかつた」と振り返る。

朝日新聞デジタルニュース（2014年2月16日）  
「無理解が背景、実情知って 菓子博の電動車いす入場制限」  
当法人の中島代表理事がシンポジウム「ひろしま菓子博2013から学んだこと」で議論したことが掲載されています。

会場では、電動車いす利用者や市議ら5人が議論。聴衆約50人も意見交換に参加した。

松尾さんは当初の対応について「電動車いす利用者の実情を知らず、人混みでは危ないだろうと希薄な根拠で運用を決めたことが混乱の原因ではないか」との見方を示した。広島市議の太田憲二さん(51)は「イベントを開く時は、できるだけ多くの障害者団体の声を聞き、行政側も障害福祉の担当課がチェックする仕組みが必要」と提言した。

電動車いすを使う福岡県大牟田市議の古庄(ふるしょう)和秀さん(41)は入場を認めた後の付き添いなどについても「お世話をするのは思いやりだと思っている主催者と、特別扱いしてほしくない私たちとの溝が最後まで埋まらなかった。障害者の実情を伝え切れていない私たちにも責任がある。ともに育ち、学び、働ける社会をつくることが大事ではないか」と指摘した。

2年後には「障害者差別解消法」が施行される。会場からは「法が今回のような例にどう影響するか、具体化までの過程を見届けよう」「法が絵に描いた餅にならないよう使うことが大事」といった意見が出た。パネリストの社会福祉士、中島康晴さん(40)は「あつれきを避けて絆は紡げない」と、対話を重ねることの大切さを強調した。(森本美紀)



《内閣府 差別禁止部会委員を務めた太田修平・日本障害者協議会理事の話》 障害のある人にとって、車いすは自由な社会参加に不可欠な用具。ひろしま菓子博の場合、年齢、性別、身体機能などが異なる様々な人が来場するのに、「電動車いす」というカテゴリーだけ作ったことに合理的な理由は見いだせず、障害者差別解消法の「差別的取り扱い」になるだろう。問題は、一方的に考えを押しつけるアプローチの仕方。当事者と同じ目線で解決しようとすれば、ここまでこじれなかった。



(障害者差別解消法) 2013年6月に国会で成立、16年4月に施行。①障害を理由にした差別的取り扱いの禁止②障害者の日常生活を制限する社会的な壁を取り除く合理的な配慮——を国や自治体に義務づける。民間事業者は①は法的義務だが②は努力義務。今秋をめどに政府が基本方針を定め、国・自治体は職員が適切に対応する「要領」で、差別的取り扱いや合理的配慮の具体例を示す。自治体は、同法にない規定を盛り込んだり強化したりする条例を制定できる。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © 2014 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.